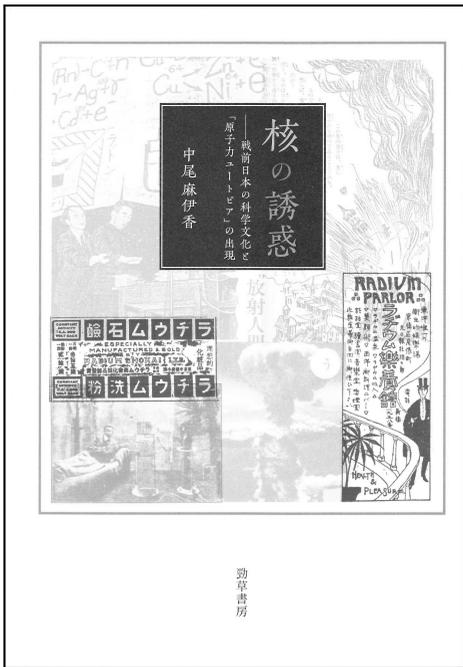


中尾麻伊香著 『核の誘惑』——戦前日本の科学文化と「原子力ユートピア」の出現

畑 中 佳 恵



自他への問いかけがぎゅうぎゅうと舞めく序章である。中心となるのは、《幾度もの被爆／被曝を経験したこの国の人々は、核の恩恵と被害を、どのように想像し、経験してきたのだろうか》（二頁）との問いであり、具体的な、といっても決して狭くない時空間を想定する問いが増殖している。《核に関する科学知識はどのように流通し、その応用はどのように想像されてきたのだろうか。それらは、大衆文化の形成と帝国の拡大、そして総力戦という同時代の事象とどのように関わるものであったのだろうか》（二頁）、《人々は科学の大衆化によって、どのように各々の目的を達成しようとしたのだろうか。それはどのように成功したのだろうか》（五頁）、《核の魔術的イメージは、果たして錬金術やキリスト教の歴史を持たない非西洋世界においてはどのようにあらわれたのか》（九頁）等々。

これら大ぶりの問題群への入り口となるのがやはり一つの問いであり、それがひとときわ印象に残るのは、著者の素朴な関心に触れるものだからだろう。一九四六年正月号の『アサヒグラフ』誌

に掲載されたキノコ雲の写真。副編集長だった飯沢匡（本名・伊澤紀）を主力に構想された「はつわらひしんぱんいろはかるた」の一枚である。いろはカルタの詞と写真を結びつけ、種々の笑いのうちに敗戦後の日本社会を浮き彫りにしようとするこの企画は、検閲を前提とした挑戦的なものだった。当の写真は「う」の「嘘から出た誠」と組み合わされている。《この「嘘」という言葉は何を意味しており、一体誰に向けられているのだろうか。どのようにして「嘘」が現実のものとなったのだろうか》（一頁）。

その「何・誰・如何様に」は、企画自体を対象にピンポイントで考察する手もあるように思う。例えば、「嘘から出た誠」のキノコ雲の写真は長崎原爆のもので、「ろ」の「論より証拠」が焦土となった広島島の航空写真であることに気付けば、両者をセットで解釈することができる。広島原爆がもたらした被害の惨たらしい現実（「証拠」は、新型爆弾による軽微なもの（「論」と偽られ報道された。その公的な情報が自国民に向けたまやかし（「嘘」に過ぎないことを曝いたのは、どんな言葉でもなく、僅か数日後のもう一つの原因被災（「誠」）だったわけである。編集側の狙いは、戦争末期の滑稽なほど無力な情報戦と、それを一刀両断にした圧倒的な現実を振り返り、読者とともに苦笑うことにある——と推測することは、強ち間違っていないだろう。

しかし著者が選択したのは容易な推論でなく、解をその背景ごとと捉えること、すなわち《核と私たちの関係を、その源流から辿りなお》（二頁）す作業だった。そのために取り組まれた膨大な調査——文中に採用されなかった資料も少なくないとするれば、想像を絶する物量のはずである——は、一九世紀末のX線発見から

戦後の原子力平和利用キャンペーンに至る凡そ一五〇年間で、国内外の科学論文、啓蒙書、講演、新聞、雑誌、詩、小説等を探り、放射能をめぐる言説の場として可視化するものとなっている。

その主な流れは、次のように追うことができる。大正期に放射性ラジウムの恩恵に与る主体として像を結んだ「大衆」。その大衆の核をめぐる欲望——錬金術をはじめとする魔術的なものを期待し、その期待を土台に科学的なものを対象化し消費する欲望——は、それを掻き立て供給する科学者およびマスメディアとの関係の中で増幅し、第二次大戦中には原爆待望論を生み出した。のみならず、原爆投下による大被災を目の当たりにした後も、大衆は原爆および原子力をすんなりと肯定する母体となる。終章では、先年の東京電力福島第一原発事故にも接続する核の物語が、現在のな「私たち」のものでもあることに注意が喚起された。この大筋において本書は、「原子力ユートピア」をめぐる日本社会の欲望が、戦前戦後を跨ぎ今に連なっている光景を照らした労作というべきだろう。資料精査に基づく立論が強い説得力を備えていることは疑いえない。

ここで蔵書の付箋を改めて辿り直すと、概要をまとめる際にこぼれ落ちた断片的な事実が目を惹く。そのうち書評者自身の関心が交差するポイントをめぐり、以下で少しばかり考察してみたい。例えば第二章では、萩原朔太郎が比較的早い時期に詩作に取り込んだ、人体を脅かす光としてのラジウム表象が取り上げられている。万能・奇効という人口膾炙したイメージを揺るがすには至らなかった少数例のうち、異端の詩人の慧眼がなしたわざとして。

烈しく忌避されるものとしての核イメーজは、広島・長崎の被曝した身体が受けた差別をはじめ、核実験の産物である被曝マグロや放射性雨への嫌悪、東海村JCO臨界事故など実際に起きた（そしてフィクションの世界で散々シミュレートされてきた）核事故の恐怖といった形をとって、歴史上に散見される。それら負のイメージを前景化する言説は、単発的であれ、反核の思想と運動の根拠となってきたらう。とすれば、核をめぐるユートピア言説の歴史は、反する言説を周縁化しつつ、それらとのせめぎ合いによって生じる裂け目をときに隠し、ときに補強してきたプロセスとして語り直される余地があるかもしれない。

後の時代にとって原爆あるいは原子力との結びつきが自明な表象を過去に遡って集めることは、その大まかな発生地と現在に通じるイメージの系譜を捉えるために不可欠だろう。本書の《日本における原爆／原子力観は原爆投下を受けても大きく変わることはなかった》（二八七頁）という結論は、この連続性を志向する作業から得られている。それゆえ、この着地点を「同じである」と前提した表象が同じであることを述べるといってトートロジーに陥らせないためには、収集したそれらが真に同じといえるか——隣接する表象との関係性において安定した意味内容を保ち続けているか——の吟味をくぐらせる必要があるように思われる。

その意味で原子爆弾との関係性を整理したくなるのが、第六章で紹介されている「殺人光線」である。《各種放射線を含む電磁波を兵器として用いる殺人光線は、日本が総力戦体制へと舵を切っていく一九三〇年代に人々の期待を集めるようになっていき、

第二次世界大戦を迎えた時点で最も期待を集めていた未来兵器となっていた》（二四三頁）。その後の戦局の悪化に伴い、未来兵器のなかでもとりわけ原子爆弾への期待が高まったのが一九四四年。この間に肯定的な原爆観が形成された、という本書のストーリーにおいて、原爆と殺人光線は来たるべき放射線兵器に与えられた新・旧のイメージとして緩やかに繋がれている。一九四五年一月に仁科芳雄が「元素の人工変換及び宇宙線の研究」で朝日文化賞を受賞するにあたり、《優秀な学者が電波兵器その他の新兵器研究第一線に多大の貢献をなしつつある》と報じた『朝日新聞』記事。これを紹介して《読者に仁科の原爆開発を期待させるものであった》（二八一頁）と分析するところに、著者による繋ぎ目の一つが顔をのぞかせているだろう。

一方、同じく一九四五年初頭に想像された放射線兵器像に、殺人光線のイメージが色濃く重なる場面があったことをどう理解するかは悩ましい。本書によると、同年一月の『朝日新聞』紙上で披露された湯川秀樹の夢想は、宇宙線に似た放射線を本土の洞穴から太平洋を越えてアメリカ首都まで届け、街を吹き飛ばす兵器をめぐるものだった。六月には理化学研究所による研究が実りのないまま中止されるという状況下にもかかわらず、《日本の最後の希望のともし火》（二八五頁）として思い描かれた原爆。その具体的なイメージを後世のフィルター無しに確認することは困難を極める。ここで僅かにいえるのは、現実化した原子爆弾の特権性をまとう表象がそれ以前の原爆と呼ばれたものと共通するかどうか、爆発を伴う殺人光線イメージのような隣接する対象との間に探られることになるだろう、ということだ。

よく似た試行錯誤は、想像し表象する主体としての「大衆」を
同定する作業にもついで回る。大衆とはどのような核イメージを、
どれ程の強度で共有していた者なのか。「殆ど皆」ほどの意味で
用いることは容易く、隣接する外部を持つ対象として描出するこ
とが至難であるのは間違いない。市井の共感や違和感がその都度
表明されてきたと考えるのは素朴に過ぎるし、当時にとつて当た
り前の認識はかえって書き残されなかった可能性もある。だから
といつて、この視点を置き去りにすることは危険である。後世か
らみて対象外と判断したくなる何者かの振る舞いについて、それ
が大衆を一括することの困難さや大衆内部の変容と関わっている
かもしれない——という視点も脱落させることになるからだ。

大衆誌『新青年』で一九二〇年に早くも紹介され、様々な報道
や小説を介して一九四四年の時点で兵器としてのイメージを有し
ていた原爆が、第二次大戦末期には実現可能な最終兵器として待
望された。本書で明らかにされたこの流れと、『原子爆弾の出現
は、日本の人々にとつて全くの晴天の霹靂であった』(二九二頁)
という一場が両立するとすれば、イメージか、イメージを認識す
る主体のどちらか(あるいは両方)に、不連続の裂け目を疑って
みることは無駄でないはずだ。

「嘘」とは、戦時中の原爆がもうすぐできるといふ言説で
はなかつたのだろうか。その嘘の世界は、科学者、メディア、
そして大衆みなを作り上げたものであった。(※中略)そし
て嘘から生まれた「誠」とは、原子爆弾にはかならない。幾
人かの人々は、それが嘘であると感づいていたのだろうか。あ

るいは、『アサヒグラフ』の編集者は嘘をついているといふ
自覚があつたのかもしれない。(三三四頁)

著者に内心を推し量られている編集者のうち、飯沢匡のそれは
ある程度だが知ることができるといふ。回想記『武器としての笑い』(岩
波新書、一九七七年一月)、『権力と笑のはざ間で』(青土社、一九八
七年六月)によると、彼はアメリカ力が原爆を保有する可能性を一
九四四年の時点で耳にしていた一人だつた。それを念頭に書いた
のが、戦争における科学の重要性と反戦思想とを折り込んだ脚本
「鳥獣合戦」だといふ。この作品を自身の遺言と呼んだ飯沢の覚
悟は、一〇月に文学座で上演する直前、内務省からクレームがつ
き尋問を受けることになつた事実をとつても伊達でない。

「鳥獣合戦」のあらずじは、翼を持つため獣の仲間から軽蔑さ
れてきた蝙蝠族が、獣軍と鳥軍の戦争で活躍するというもの。昆
虫学者の蝙蝠・サイエが考案した、空から羽虫の菌を撒くといふ
戦略は功を奏し、鳥軍は弱つて散り散りになる。敗者側の昆虫学
は戦中に研究費が与えられなかつたため遅れており、対抗策を講
じることができなかつた。原爆との接点は一見希薄に感じられる
が、『日本は必ず空からの思いも懸けぬ科学的な新戦法によつて
やられるだろうといふ予感』(『武器としての笑い』七七頁)を胸に
隠さず公にするため選ばれた、際どい表現であつたともいえる。
一九五二年夏、『アサヒグラフ』編集長として「原爆被害の初
公開」特集を世に問うたのもこの人だつた。飯沢が占領下を脱す
る時期を慎重に待ち、消滅から守り抜かれた写真の公開に踏み切
つたことは、よく知られる事実である。戦中戦後に言論活動の不

自由さを痛感し、それを踏まえて可能な手段を模索した彼は、原爆にまつわる表現が嘘と誠のどちらかに割り切れるものでないことを熟知する一人だったのではないだろうか。

嘘が誠になるところには断絶と連続が同時に生じている、といってみよう。消費的となる新奇な商品としての放射能がその害毒において美的価値と結びつけられるとき、あるいは魔術的なエンターテインメントが科学技術として高度な破壊殺傷能力を実現するとき、またあるいは「人類」規模の破壊を可能にする巨大エネルギーが「人類」規模の福利を可能にするものとして語られ始めるとき。そこには土台を前提とした反転のドラマが生じるとともに、反転し尽くせない大きな残余が（場合によっては活性化すらして）長らく場を占め続けるのだろう。本書はその後者をめぐる物語である。

二〇一五年七月二〇日 勁草書房 四一六頁 二五〇〇円＋税